

YA-1

1955年 / 市販車

日本が復興への道を歩み始めた 1950 年代、無数の企業が二輪業界へと参入し、その数は一時 204社までふくれ上がった。そんな中、ヤマハ発動機の前身である日本楽器の幹部社員に対し、川上源一社長から「オートバイのエンジンを試作し、1年後には本格的なオートバイの生産に入りたい」という方針のもと、数種類の欧州車が候補から DKW 社の2ストローク・125cc 車「RT125」をベースに開発をスタート。

変速機は3段変速から4段変速に変更し、変速ペダルとキックペダルを同軸とする独創の設計を試みた。さらに、始動方式は変速ギアがどの位置にあると、クラッチさえ切ればキックが可能な日本で最初のプライマリー方式を採用し、画期的な扱いやすさを実現した。

黒色一辺倒のモーターサイクルが当たり前の時代、「栗毛色の駿馬」をイメージしたマルーン色とクリーム色のツートンカラーは斬新で、シャープな加速性、軽快なハンドリングなどから「赤とんぼ」の愛称で呼ばれた。

デザインを担当した東京芸術大学図案部の学生たちの集団が起点の「GK (Group of Koike)」は現代に至る数々のヤマハモーターサイクルデザインを創出することとなる。

